食の原風景
― 畠と畑の文字世界 ―

母利司朗

はじめに

「畠」と「畑」。なにか懐かしい記憶の刷り込まれた文字である。私たちは今これを何と読んでいるのだろうか。ある人はハタケとハタケ。ある人はハタとハタ。またある人はハタケとハタであろうか。

現代では、この二つの文字に、はっきりとした使い分けがなされている。

はたけ【畑】『▲畠』①野菜・穀物などをつくる耕地。水は入れない。

はた【畑】『▲畠』〈名〉はたけ［古い言い方］

（三省堂『現代新国語辞典（第二版）』）

すなわち、「畑」の字は、通常ハタケと読み、常用漢字として広く使われる。「畑」の別の読み方となっているハタは「古い言い方」であるという。また、「畑」が常用漢字であるのにたいし、「畠」は、一般にはあまり使われない漢字であり、人名に用いられる程度である。

これをさらに詳しく見れば、次のような説明にいきあたる。黒田日出男氏は、『日本中世開発史の研究』[1]の中で、「中世の「畠」と「畑」」という論を設け[2]、二つの文字の、平安時代から近世にかけての関係と推移を、史資料に基づいて説いている。それを要約すればおよそ次のようなものとなる。

平安時代　↓「畠」のみ（『平安遺文索引編』）。
鎌倉時代　↓「畠」と区別される「畑」（焼畑を指し示す）の登場
近世極初　↓「畠」で統一される（検地帳）。
慶長・元和年間　↓「畠」と「畑」の両字混在（同）。
寛永期以降　↓「畑」の字で統一される（同）。

『世界大百科事典』[3]の、

日本史にみる〈畠〉

中世までは常畠である〈畠〉の字と、焼畑をさす〈畑〉の字とはかなり厳密に使いわけられていたが、戦国末期から近世初頭にかけて〈畠〉と〈畑〉の混用が始まり、十七世紀の半ばには検地帳類でもほとんど〈畑〉の字ばかりになっていった。

という説明も、右の黒田説を踏まえたものであろう。

また、原田信男氏は、「史料論1　中日火耕・焼畑史料考」[4]の中で、

さらに史料を博捜し、右の両字の関係を確認している。

これらによれば、「畠」は定畠、「畑」と書く文字は焼畑、として意味の上ではっきりと区別されていたにもかかわらず、混在の時期を経て、二つの文字が、近世初期の早い段階で「畑」の字にもっぱら収束していった、というのが、日本史学における定説となっているように見受けられる。とすれば、現代のように、ハタケといえば「畑」と書く習慣のはじまりは、近世初期の十七世紀半ばであった、ということになるのである。

しかし、黒田氏がそもそも触れていたように、この二文字の関係と推移は、歴史学であつかういわゆる「史料」の範囲から導かれた定説である。「畑」という文字に収束していったとされる十七世紀の半ば、目を「検地帳類」といった「史料」の外に向けた時、そこには「畠」と「畑」について、どのような世界が広がっていたのであろうか。本稿は、それを考える材料として、当時大流行していた俳諧という文芸を書き留めた文字資料に注目し、そのすがたを明らかにしてみたい。

一　「畠」と「畑」を考えるための俳諧連想語辞典

十七世紀の半ばすぎの延宝四（一六七六）年、『俳諧類船集』という本が出版された。この本は、中世の終わりから近世のはじめにかけての事物や風俗を知るためだけではなく、現代人にはなかなかつかみがたい前近代の日本人の物の考え方や、感性を知るための恰好の資料として、日本文学を研究する人たちの間で早くから注目され、利用されてきた本である。

本来は、俳諧の中でも、五七五、七七、五七五というように、句を長く続けていく「連句」という形式を詠むにあたって、ある言葉にどのような言葉を付けていったらよいか、を知るための参考書として作られたものである。

しかし、付けていく、ということは、連想していく、ということであり、これをうまく利用することによって、当時の人々が、ある言葉からどのような言葉を連想していったのかを知ることができる、ということになる。このような連想関係は、五七五と七七を連続させる連句の中にだけあてはまるのではない。現代の俳句の元となった、五七五だけで独立した形の「発句」といわれる形式のものにおいても、一句の中に同時に詠まれた言葉と言葉の関係を一種の連想関係と見ることもできるはずである。

そこで、まず手はじめに、この本の中に二つの文字をさがしてみよう。

畠（ハタケ）

花　菊　背戸　顔のしらくぼ　芋　茄子（ナスビ）　瓜　蝶　うぐろもち　下屋敷　薬種　藍（アヰ）

請レ学（フシテ　ヲシヘ）レ為（ツクラン）レ圃（ヲ）曰吾不レ如二老一圃一と有もはたけの事とぞ。陰陽師有宗が兼好をいさめしもことはりぞ。しかまに作るあゐともよめり。

畑（ハタ）

山賤　岨伝（ソハ）ひ　鳩　鹿　獣　伏猪（フスヰ）　庵（イホリ）の煙（ケムリ）　岩根　麦　蕎（ソバ）わらび　豆　兎　薄　柴　土佐

春霞に立まじはるは賤がやく畑のけぶりとかや。うちかへす片山畑ともつゞけたり。北山には雲が畑あり。畑えだあり。西山には梅が畑あり。

「畠」にはハタケというフリガナが付けられ、「畑」という文字にはハタというフリガナがつけられている。フリガナというよりは、むしろ、ハタケという言葉は「畠」と書き、ハタという言葉は「畑」と書く、というように考えるほうがよいのかもしれない。

「畠」と書く文字からは、芋、茄子、瓜といった作物が連想されており、その場所は、家の裏庭や、下屋敷のあった郊外が連想されている。一方、「畑」という文字からは、山賤、岨伝ひ、という山間、山裾をイメージする言葉があげられ、そこで収穫されるものは、麦や蕎、豆となっている。「春霞に立まじはるは賤がやく畑のけぶりとかや」という一文からは、焼畑が思い浮かぶであろう。

二つの文字は、読み方が異なるように、本来別々の言葉を示す文字であった。二つの文字から目に浮かぶ風景は、『類船集』という十七世紀半ばに出版された本の中においては、まったく異なった風景なのであった。

二　「畠」と「畑」の混同

しかし、『類船集』と同じ時代に詠まれた実際の俳諧を見てみると、この二つの文字は、はっきりとは使い分けられていないことに気付かされる。

たとえば、読み方一つをとっても、「畠」は、

まめの畠をあらしこそすれ
此秋はいつより味噌が高からん　（『貞徳独吟』第二）

ではハタケであるが、

いくばくの**田畠**迄も霜みちて
在江ふかくさむげたつ比

（重治『誹諧独吟千句』第二　寛永二十〈一六四三〉年成・写）

では、ハタ、あるいはハクである。「畑」はというと、

蝶々のとまる垣根や朽ぬらん　可頼
菜畑のあたり湿気ふかしも　安静

（『紅梅千句』第四　明暦元〈一六五五〉年刊）

はハタであるが、

細波よする跡の小便　武仙
菜畑に浜の真砂はつくる（とも）　西花

（『天満千句』第九　延宝四〈一六七六〉年刊）

は、ハタケと読むのであろう。

このような読み方の相互乗り入れは、それぞれの文字の表していた意味の区別、境目がわかりにくくなっていたことを示しているのだと思われる。

その典型的な例を次にあげてみよう。『類船集』に記される、

春霞に立まじはるは**賤がやく畑のけぶり**とかや。うちかへす片山畑ともつゞけたり。北山には雲が畑あり。畑えだあり。西山には梅が畑あり。

という文章は、「畑」が、本来、山間、山裾に作られた焼畑を意味す

るものであると意識されていたことを示す文章である。ところが、あきらかにその焼畑を表していると思われる句にも、

さわらび

さわらびのもえてやくろの**焼畠**

（『塵塚誹諧集』上　寛永十〈一六三三〉年刊）

しろきものこそくろくなりたれ

去年**やきし畠**の雪はみなきえて　（同）

春雨の降れば頭やいたむらん

植ぬる芋のくさる**なぎ畠**

（『承応二年熱田万句懐紙』第三　一六五三年成）

のように、「畠」という文字を用いた例が見られる。

また、『類船集』に記されていた「山畑」という言葉についても、

山畑の茶つみぞかざす夕日かな　重五

（『春の日』　貞享三〈一六八六〉年刊）

廿三日　伊勢ヨリ長谷路へ出候。田丸ヨリ檜ノ牧迄、重山嶮岨ヲ越ス。風景時としてうつりかはる。尤奇絶の地也。

山畑の芋ほるあとに伏猪哉　晋子

（『句兄弟』下　元禄七〈一六九四〉年刊）

と、「畑」が用いられる一方で、

影照院は崎陽の辰巳に有。入江みぎりに廻り、小島山向に横たふ。吟友支考が

蕎麦にまた染かはりけん**山畠**

と聞えしは、秋の比にや来りけん。其年の名残惜まんと人々に誘れて

山畑や青み残して冬構　去来

（『渡鳥集』　元禄十五〈一七〇二〉年跋）

のように、同じ本の中に書かれているにもかかわらず、「畠」と「畑」が隣り合って使われている場合さえ見られるのである。

二つの文字の関係を考えるには、このような混乱のあったことを十分頭において見ていかなければならないであろう。

三　畠

では、十七世紀の俳諧で二つの文字が実際どのように詠まれているのかをみていこう。まず「畠」と書く「ハタケ」の方を取り上げる。

さきほども『類船集』を引いて触れたように、「畠」の連想語は、下屋敷の置かれることの多かった郊外や、家の裏口、背戸の向こうの耕された場所であったり、花や菊、芋、茄子、瓜といった作物であった。かつての日本人の目に浮かぶ「畠」とはそういう所であった。

実際の俳諧で詠まれたものを見ていくと、

難面もはやおち瓜と成けらし

背戸の畠に待とゆふがほ

（『世話焼草』巻五　明暦二〈一六五六〉年刊）

のように、背戸の畠が詠まれているし、作物も、ほとんどが『類船集』の中で連想語としてあげられるものであった。その一部を一、二例ずつあげてみよう。

（瓜）

作そふ**畠の瓜**はまだならで
いづくもおなじひでりかと見れ
（『寛永十三年熱田万句』第七十九）

うりの畠けのある丶宵々
草も木もつよきひでりにいたむ也
あはれにみゆる里の百性
（『寛永十四年熱田万句（乙）』第六十七）

（大豆・小豆）

廿六（七月廿六日…日発句）
みそはぎの**まめ**にうちそふ**畠**かな
まめの畠をあらしこそすれ
（『塵塚誹諧集』）

此秋はいつより味噌が高からん
（『貞徳独吟』第二）

（茄子）

むかしさつと隣の娵の名を立て　志斗
なすび畠の味な事見た　松意
（『談林十百韻』延宝三〈一六七五〉年序刊）

（菜）

よむかきにけり言葉の色
秋よりも作り立たり**ちしや畠け**
（『寛永十四年熱田万句（乙）』第六十六）

ちさ畠見えみ見えずみ霧の隙
せどの屋しめるむら雨の露
（『時勢粧』巻四上　寛文四〈一六六四〉年
三月十日「男何」鱸催笑独吟）

（芋）

雨降に**いもの畠**やおこすらん
さえねど人のあそぶ名月
（『淀川』寛永二十〈一六四三〉年刊）

名月に鞭をうつてや出ぬらん
まはらば三里**芋畠**かも　好茂
（『誹諧当世男』付句　延宝四〈一六七六〉年刊）

（蕎麦）

中ばかりふけかし野分**そば畠**　長頭丸
（『崑山集』巻十一　慶安四〈一六五一〉年刊）

春草の雪や花咲**蕎畠**　尾州園田氏　笑入
（『誹諧晴小袖』寛文十二〈一六七二〉年序刊）

（麦）

おもふほどこそくらはれにけれ
牛馬の通路近き**麦畠**
（『あぶらかす』寛永二十〈一六四三〉年刊）

鯉をつらんためか淀野の麦畠　長頭丸（『崑山集』巻六）

（花）

みな薬草の枯果し比
おそらくは唐にもあらじ**花畠**　意春
（『俳諧塵塚』巻下　同十二〈一六七二〉年刊）

（粟）

粟稗も色みがちなる**くり畠**
　秋をたのしむ伊賀の貧僧
（『寛永十四年熱田万句（乙）』第三十二）

（きび・粟）

いく秋きびのわろき大臣
とりめなき知行やあはれ**粟畠**
（『誹諧独吟集』巻下　卜養　寛文六〈一六六六〉年刊）

稲のみもすくなき秋の**きび畠**　秋田　窪田安信
（『続山之井』秋誹諧連歌　同七〈一六六七〉年刊）

（その他）

霧や煙吹風口の**たばこ畠**　江戸　季治
（『ゆめみ草』巻三　明暦二〈一六五六〉年刊）

あらめでたやといはふ薬子
畠には自然と**茗荷**萌そめて　貞徳
（『口真似草』巻五　同年刊）

四　畑

一方、「畑」の方は、『類船集』では、山賤、岨伝ひ、鳩、鹿、獣、伏猪、庵の煙、岩根、麦、蕎、わらび、豆といった言葉が連想されていた。鹿、猪は、山間、山裾にふさわしい動物としてあげられたのであろう。蕎は、山間の、地味の豊かでないところで作られる作物である。「畑」の字は、山間、あるいは山裾に位置する作物の生産場所を意味していたことがうかがえる。本来は焼畑を指した文字であることも先に触れた。

しかし、実際の俳諧を見てみると、麦、蕎、わらびといった、山間、山裾と結びつくような作物はほとんど詠まれておらず、「畠」という文字から連想されていたのと同じ、瓜、大豆、茄子、菜、花、菊などがもっぱら詠み込まれており、「畠」の風景との明かな違いは見られない。その一部をこれも一、二例ずつあげてみよう。

（瓜）

契りふかさは実天下一
堀ひこも**瓜畑**になすたくみにて
（『承応三年写熱田万句』第九）

契りぬる中も化生の縁ならし
一樹の陰につゞく**瓜畑**　（『俳諧集二千句』第二十）

（豆）

山畑に作り置ぬるおどろかし　常知
大豆ややうやう色に成らん　宗祐
（『花月千句』第三　慶安二〈一六四九〉年刊）

枝大豆も取て今はた味噌につき
畑に日数を送る陣小屋
（『清水千句』　寛文十三〈一六七三〉年刊）

（茄子）

寄麗にも道の草々むしり捨
そだちことなる此**茄子畑**
（『承応二年熱田万句懐紙』第十五）

年はよりてもあぢはたがはず

古畑に残るもまれの秋**なすび**　（『塵塚誹諧集』下）

（菜）

細波よする跡の小便　武仙

菜畑に浜の真砂はつくる□　西花（『天満千句』第九）

（粟）

鶉鷹や身をつくしても**粟畑**　風鈴軒

（『続山之井』秋之発句下）

（花）

菊畑に蝶や千秋楽の舞　たんばかいばら　政長

（　同　秋之発句上）

御番衆や春宵千石**お花畑**　岡村氏　不卜

（『誹諧当世男』春　延宝四〈一六七六〉年刊）

（その他）

たばこ畑花に葉よ名は**たばこ畑**　備前岡山小松原次郎右衛門時之

（『崑山集』附録）

五　結語

以上、「畠」と「畑」という二つの文字の書き分けについて、従来の研究で、混在の時期を経ながら「畑」の一字に収束していったと指摘される十七世紀半ばの俳諧をながめてみた。二つの文字は、そのもともとの意味を意識した場合こそ、『類船集』のように明確に区別されたのであろうが、日常の文字遣いにおいては、これといった規範意

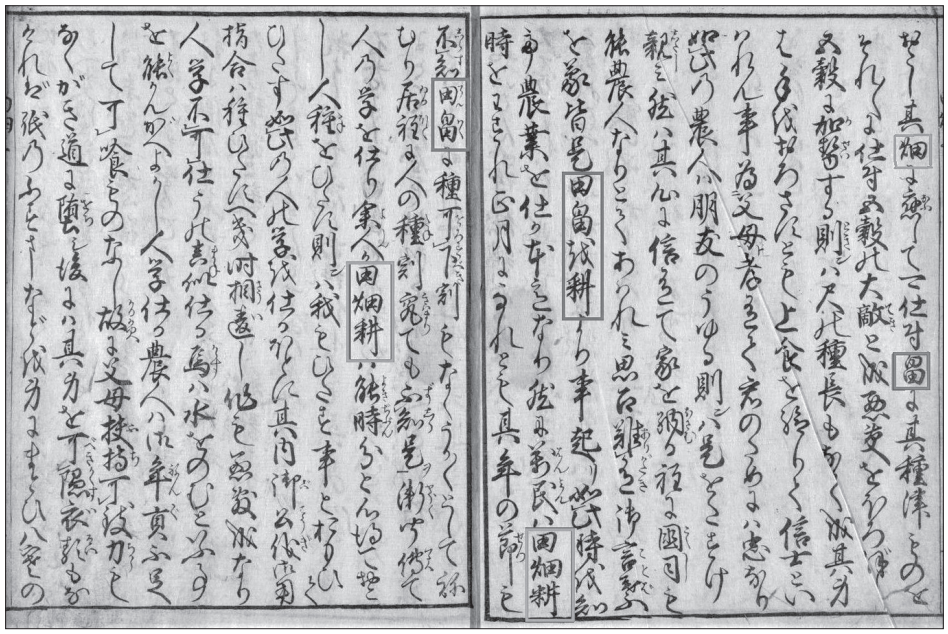

図1　『田畑難題物語』（国立国会図書館蔵）

識もなく、ばらばらに使われていた、というしかない。

その象徴的な例を最後に一つあげてみよう。天和三（一六八三）年に出版された『田畑難題物語』という仮名草子がある（国立国会図書館蔵・上巻のみ伝存）。この本には、タイトルの通り、「田」や「畑」という文字がたくさん出てくるが、実際の本文では、かならずしも「畑」という文字ばかりが書かれているわけではなく、「畠」の字も多く書かれている。その様子のわかりやすい箇所を示してみよう（図1）。ご覧のように、同じような意味で使われているにもかかわらず、どちらの文字を用いるかにはまったく規則性がない。

ぐっと下って十九世紀の半ば、明治に目を向けてみても、この状況にかわりはなかった。『農業往来』という有名な往来物がある。『農業往来（初編）』（明治三年年六月・青松軒刊）の、

畠物者、大麦、小麦、大豆、小豆、大角豆、豌豆、蕎麦…（図2）

『訓蒙農業往来』（橘慎一郎著　明治六年十一月・文江堂刊）の、

畠地に作る品々は、豆、麦、小麦…（図3）

には、あいかわらず「畠」が使われ、『村童必誦：一名・地方農業往来』（川瀬白巌著　明治六年十二月・鳩居堂刊）には、

六尺一歩之間竿を以て、田畑に竿を入、反別を…（図4）

と、「畑」の字が使われる。また、『改正農業往来』（山本温編　明治十五年・松雲堂刊）には、同じ本の中に、「田畠」と「田畑」が意味の区別なく同居さえしている（図5、図6）。

少なくとも明治のはじめころまでは、「畠」と「畑」は、書き分けの意識もなく混用されており、「畠」の字が使われなくなる、という

図2　国立国会図書館蔵

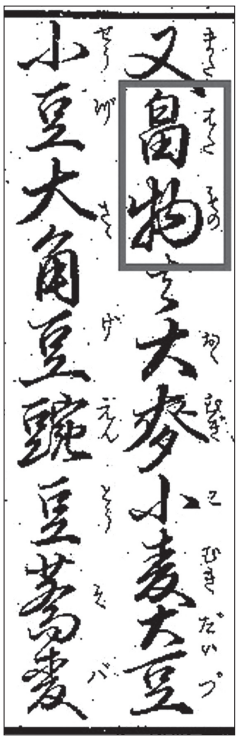

図3　同

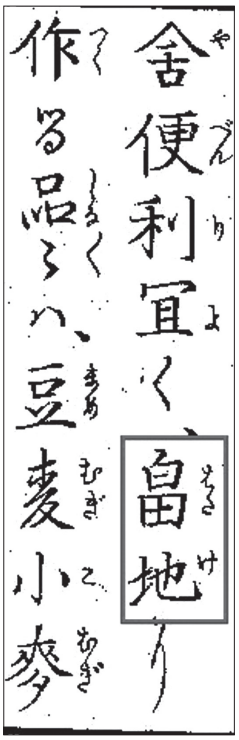

図4　同

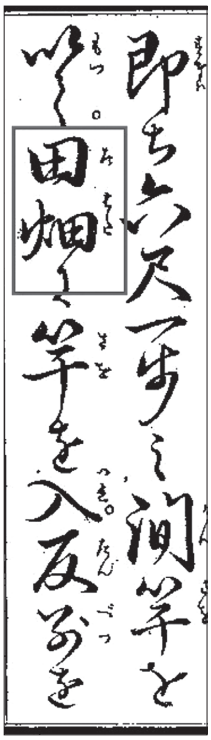

図5　同

図6　同

こともなかったとみてよい。それぞれの文字から思い浮かべられる風景も、人により、まちまちだったことであろう。

従来歴史学の範疇でとりあげられてきた「史料」、中でも「検地帳」類には、その理由こそわからないが、「検地帳」とはこう書くべきである、という一種の規範意識のようなものがあり、それが「畑」という文字に偏っていったことの背景にあったのではないだろうか。一方、俳諧を書き留めた筆者や、版本の元になった清書本の筆者たち、これら不特定多数の筆者たちに、「畠」と「畑」をめぐってのそのような規範意識があったとは思えない。むしろ、境目のはっきりしない、雑然とした二つの文字の書き方のありようにこそ、当時の人々の文字遣いが現れていると見るべきなのであろう。

ハタケといえば「畑」、という現代人の文字遣い意識がいつごろから生まれたのか、いつ変わっていったのか、ということは、さらに時代を下る形で継続的に追っていかなければならないが、本稿の問題意識を越えた問題となる。今後の課題としたい。

注

(1) 校倉書房・昭和五十九年刊。
(2) 第一部第二章付論三。
(3) 平凡社・改訂新版第六刷　ジャパンナレッジによる。
(4) 佐藤洋一郎氏監修『焼畑の環境学―いま焼畑とは』思文閣出版・平成二十三年刊。

付記

本稿は、和食文化学会二〇一九年第一回研究集会（平成三十一年二月　於：京都府立京都学・歴彩館）における口頭発表「畑と畠の風景―十七世紀の俳諧資料より―」に基づいてまとめたものである。席上質問・ご指摘をいただいた諸氏に御礼申し上げる。なお、同じ作物が「畠」と「畑」の両方にまたがって表記されるような一見混同と読み取れる現象の背景に、「二毛作」という原因があったのではないか、というご指摘があった。考えさせられる指摘であるが、引用例の一つ一つにそれを確認する手立てがなく、踏み込んで考えることができていない。なお引用文は、版本や写本しかないものについてはそれにより、翻刻のあるものについては最もふさわしいものによった。図版は、国立国会図書館所蔵のものによる（国立国会図書館デジタルコレクション）。

（二〇一九年八月二十一日受理）

（もり　しろう　文学部和食文化学科教授）